

Untere Grenze des Duralsacks

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38645

他種々傳染病ノ入門部ト爲スノ說ニ徴シ其病毒須臾ニシテ全身ニ蔓延シ其途ニ劇甚ナル全身
症狀ヲ起スニ到ル素ヨリ怪ムニ足ラズ而シテ其鼻粘膜ニノミ限局スルモノト其趣キヲ異ニス
ル素ヨリ至當トス

故ニ余ハ言ハントス本病ハ實扶菌ニ起因シ來リ得ルモノニシテ惟タ時トシテ該菌ノ發見セラ
レサル場合ナキニアラズトナスノミ實ニ實扶菌ノ發見ナキヲ以テ直ニ之ヲ實扶病ニ非ラスト
云フ可カラサルコトハ今回余カ患者ニ就キ確カニソノ一ヲ證明シタリト確信ス依テ茲ニ之ヲ
報ス

○日本人ノ脊髓 (第一報告) (承前)

京都醫科大學解剖學教室ニ於テ

醫科大學助手
醫學得業士

久保武

(都京)

(第三) 硬膜囊下界位

Untere Grenzdes Duralsacks.

脊髓硬膜囊ノ下界位ヲ制定スルハ殊ニ外科的手術上 (Durainjection n. s. v.) 往々緊要ノコトア
ルベシ

余ハ男屍六體、女屍五體ニ就テ調査シ次ノ成績ヲ得タルナリ

(原著)

日、本、人、脊、髓、硬、膜、囊、下、界、位

男、子 (六回)

第、二、薦、骨、椎、ニ、存、セ、ル、モ、ノ 四、回

上、部、ニ、位、セ、ル、モ、ノ 一、回

中、部、ニ、位、セ、ル、モ、ノ 二、回

下、緣、ニ、位、セ、ル、モ、ノ 一、回

第、三、薦、骨、椎、ニ、存、セ、ル、モ、ノ 二、回

中、部、ニ、位、セ、ル、モ、ノ 二、回

差、隔 Schwankungsbreite.

最、高、ノ、モ、ノ 第、二、薦、骨、椎、中、部、ニ、位、セ、ル、モ、ノ

最、低、ノ、モ、ノ 第、三、薦、骨、椎、下、部、ニ、位、セ、ル、モ、ノ

女、子 (五回)

第、二、薦、骨、椎、ニ、存、セ、ル、モ、ノ 三、回

上、部、ニ、位、セ、ル、モ、ノ 一、回

中、部、ニ、位、セ、ル、モ、ノ 一、回

下、部、ニ、位、セ、ル、モ、ノ 一、回

第、三、薦、骨、椎、ニ、存、セ、ル、モ、ノ 二、回

中部ニ位セルモノ 一回
下部ニ位セルモノ 一回

差隔 Schwankungsbreite.

最高ノモノ 第二薦骨上部ニアルモノ
最低ノモノ 第三薦骨下部ニアルモノ

フイツツチル Pfitzner ハ前記論文ニ於テ又同時ニ硬膜囊下界位ニ就テ詳載セリ、氏ガ男屍十二、女屍五體ニ於テ計測セシ處ニヨレバ

男子 (十二回)

第二薦骨椎 (2.S.) ニ位セルモノ 五回
第三薦骨椎 (3.S.) ニ位セルモノ 一回
第一薦骨椎 (1.S.) ニ位セルモノ 六回

差隔 Schwankungsbreite.

最高ノモノ $1.S\frac{3}{4}$
最低ノモノ 3.S.

女子 (五回)

第一薦骨椎ニ位セルモノ (1.S.) 一回
第二薦骨椎ニ位セルモノ (2.S.) 三回

第三薦骨椎ニ位セルモノ (3.S.)

一回

差隔 Schvankungsbreite.

最高ノモノ 1.S.

最低ノモノ 3.S.

ラウメル Rauber ニヨレバ

硬膜囊ノ下部ハ只單ニ第二薦骨椎ニ達スト云ヘリ

余ハ今西書ニ就テ弘ク之ヲ檢索スルコトヲ得ザルモ只前記 Pfizner ノ計測ニ比較スルキハ一般ニ我レノ僅ニ低位ナルガ如キヲ認知スルナリ

Pfizer ニアリテハ男子ハ 1.S. ニ終ルモノ最モ多ク 2.S. 之ニ亞キ 3.S. ハ遙ニ少ナシ又女子ハ 2.S. ニ位スルモノ最モ多ク 1.S. 3.S. 之ニ亞ゲリ然ルニ余ガ成績ニ於テハ男子ハ 2.S. ニ終ルモノ最モ多ク 3.S. 之ニ亞ゲリ又女子ハ 2.S. ニ終ルモノ三回 3.S. ニ終ルモノ二回ナリシナリ

第參篇 脊髓諸部ノ位置關係(第三表參照)

Lagerverhältnisse d. Rückenmarksheile (Tabelle III.)

茲ニ余ハ第一脊髓頸膨大部及腰膨大部ノ位置第二頸膨大最大部腰膨大最大部及脊髓胸髓最小部ノ位置關係ヲ記述セムトス

第壹章

(第一) 頸膨大部位 Lage d. Halsanschwellung.

余ガ二十五名ノ屍體ニ就テ計測セシ處ニヨレバ

男子 (十七回)

上界

第一頸椎(1.H.)ニ始マルモノ 十回

第二頸椎(2.H.)ニ始マルモノ 六回

第三頸椎(3.H.)ニ始マルモノ 一回

下界

第七頸椎(7.H.)ニ終ルモノ 八回

第六頸椎(6.H.)ニ終ルモノ 八回

第二胸椎(2.B.)ニ終ルモノ 一回

女子 (八回)

上界

第一頸椎(1.H.)ニ始マルモノ 三回

第二頸椎(2.S.)ニ始マルモノ 四回

第三頸椎(3.H.)ニ始マルモノ 一回

下界

第三頸椎(7.H.)ニ終ルモノ 四回

第六頸椎(6.H.)ニ終ルモノ 三回

第一胸椎(1.B.)ニ終ルモノ 一回

以上示スガ如シ

(第二) 腰膨大部位置 Lage d. Lendenanschwellung.

余ガ男屍十六、女屍八體ニ就テ計測ノ結果

男子 (十六回)

上界

第九胸椎(9.B.)ニ始マルモノ 二回

第十胸椎(10.B.)ニ始マルモノ 五回

第十一胸椎(11.B.)ニ始マルモノ 七回

第十二胸椎(12.B.)ニ始マルモノ 二回

下界

第十二胸椎(12.B.)ニ終ルモノ 六回

第十一胸椎(11.B.)ニ終ルモノ 一回

第一腰椎(1.L.)ニ終ルモノ 九回

女子 (八回)

上界

第九胸椎 (9.B.) ニ始マルモノ 一回

第十胸椎 (10.B.) ニ始マルモノ 四回

第十一胸椎 (11.B.) ニ始マルモノ 三回

下界

第十二胸椎 (12.B.) ニ終ルモノ 四回

第一腰椎 (1.L.) ニ終ルモノ 四回

右ノ成績ヲ得タリ

今兩膨大部ニ就テ西書記スルトコロノモノヲ對比セムカ

ヘンリー Henle ニヨレハ

頸部膨大ニ就テハ上界ヲ記サス單ニ第二胸椎ニ終レリト云フ

又腰部膨大ニ就テハ下界ヲ記サズ只第十胸椎ニ始マルト稱セリ

ラウエル Rauber ニヨレハ

頸膨大部ハ第二頸椎ニ於テ始マリ第二胸椎ニ終レリトナセリ

腰膨大部ハ第十胸椎ニ始マリ第十二胸椎ニ達シ而シテ之ヨリ圓錐形ノ尖端 (Apex) ニ縮退シ

更ニ終線ニ移行スト云ヘリ

チーケン Nielsen ニヨレバ

頸部膨大ハ錐狀躰交入ノ下部ニ始マリ第二胸椎部分ニ終レリ

腰部膨大ハ第十胸椎ノ高サ、又ハ第一腰神經ノ起始ノ上部ニ始マリ下方ハ直接ニ錐體ニ移行セリ

又腰部膨大ノ弘サノ縮退ハ上方ニハ徐々ニナリ下方ニハ(錐體ニ於テ)甚ダ速ニ減縮セリ、是故ニ腰部膨大ト錐體ニ對シテ銳キ區界ノ成立セザルモノナリ

Charpyハ此眞ノ區界面トシテ第五薦骨神經及尾閭骨神經對ノ發出間ニ設ケタル面ヲ賞用セリ又 Raymondハ此境界線ヲ高ク引ケリ即チ最モ多クハ第三及第四薦骨神經對ノ間ニ設ケタルナリ

今以上總括シテ歐洲人ノ位置ト其大躰ヲ比較センカ、一般ニ歐洲人頸部膨大ハ第一乃至第二頸椎ニ始マリ第二胸椎ニ終ルモノ最モ多キカ如シ

余ガ成績ニ徴スレハ上界ハ稍々近似スルモ下界ハ多ク却テ高キニ位スルノ傾キアリ即我ニアリテハ男女共ニ第六乃至第七頸椎ニ終ルモノ最モ多カリシナリ

次ニ歐洲人腰部膨大ハ一般ニ上界ハ第十胸椎ニ始マリ下界ハ畧第十二胸椎ニ終ルモノ、如シ(但シ下界ハ頓ニ狹縮シテ錐體ニ移行スルヲ以テ各自見ルトコロニヨリ其成績異ナルベシ然レモ余ハ其上界ニ於テ彼我相比較シテ我レノ確ニ低キヲ認證シ得タルナリ即余ガ計側ニヨレバ上界ハ第十乃至第十一胸椎ニ位スルモノ最モ多カリシナリ

第貳章

(第一) 頸膨大最大部位置 (Grösste Stelle der Halsanschwellung.)

余カ二十五名ノ屍體ニ就テ調査セル處ニヨレハ

男子 十七回

第五頸椎ニ存セルモノ 十回

第六頸椎ニ存セルモノ 二回

第四頸椎ニ存セルモノ 五回

女子 八回

第六頸椎ニ位セルモノ 三回

第五頸椎ニ位セルモノ 四回

第四頸椎ニ位セルモノ 一回

余ハ尙是ト同時ニ脊髓神經根トノ關係ヲ測定セリ

男子 十三回ノ調査中

第五頸神經根部ニ位セルモノ 五回

第六頸神經根部ニ位セルモノ 七回

第七頸神經根部ニ位セルモノ 一回

女子 七回ノ調査中

第六頸神經根部ニ位セルモノ 四回

第五頸神經根部ニ位セルモノ 一回

第七頸神經根部ニ位セルモノ 二回

(第二) 脊髓胸髓最小部位置 Kleinste Stelle d. Rückenmarks (Brustmarks)

余ガ二十五名ノ屍躰ニ就テ計測ノ結果

男子 十七回

第六胸椎ニ位セルモノ 十回

第七胸椎ニ位セルモノ 三回

第八胸椎ニ位セルモノ 二回

第九胸椎ニ位セルモノ 二回

女子 八回

第六胸椎ニ位セルモノ 五回

第七胸椎ニ位セルモノ 一回

第八胸椎ニ位セルモノ 一回

第九胸椎ニ位セルモノ 一回

次ニ脊髓神經根トノ關係ヲ測定スルニ

男子十一回ノ調査中

第九胸神經根部ニ位セルモノ 三回

第十胸神經根部ニ位セルモノ 四回

第八胸神經根部ニ位セルモノ 一回

第七胸神經根部ニ位セルモノ 二回

第六胸神經根部ニ位セルモノ 一回

女子 八回ノ調査中

第八胸神經根部ニ位セルモノ 三回

第七胸神經根部ニ位セルモノ 三回

第十胸神經根部ニ位セルモノ 一回

第十一胸神經根部ニ位セルモノ 一回

(第三) 腰膨大最大部位置 Größte Stelle der Lendenanschwellung.

余ガ同ジク二十五屍ニ就テ計測ノ結果

男子 十七回

第十二胸椎ニ位セルモノ 十二回

第十一胸椎ニ位セルモノ 二回

第十胸椎ニ位セルモノ 三回

女子 八回

第十二胸椎ニ位セルモノ 三回

第一腰椎ニ位セルモノ 一回

第十一胸椎ニ位セルモノ 三回

第十胸椎ニ位セルモノ 一回

次ニ脊髓神經根トノ關係ヲ測定スルニ

男子 六回ノ調査中

第五腰神經根部ニ位セルモノ 二回

第三腰神經根部ニ位セルモノ 二回

第四腰神經根部ニ位セルモノ 一回

第一腰神經根部ニ位セルモノ 一回

女子 四回ノ調査中

第三腰神經根部ニ位セルモノ 二回

第四腰神經根部ニ位セルモノ 一回

第五腰神經根部ニ位セルモノ 一回

今以上三部位ニ就テ西書記スル處ノモノヲ摘録セムカ

ラウメル Rauber ニヨレバ

頸膨大ノ最大部位 (größte Breite) ハ第五乃至第六頸椎ノ高サニアリ

腰膨大ノ最大部 (Maximum) ハ第十二胸椎ニ達スト云フ

クンナー Henle ヲヨシ

頸膨大ノ最大部位ハ第五頸神經ノ起始位ニ存スト云フ

チーヘン Ziehen ノ記載ニヨレバ

頸膨大最大部位ハ第五及第六頸椎ノ高サニ於テ存シ

腰膨大最大部位ハ第十二胸椎ノ高サニ於テ存ス茲ニ腰及三箇ノ最上薦骨神經起始ヲ圍繞セリト云フ

脊髓ノ最小部位ニ就テハ

ラウエチル Ravenel ハ精細ナル計測ノ結果 (Zeitschrift f. Anatomie u. Entwicklung, 1877) 概シテ胸椎ノ殆ンド中部ニ存スト云フ

ヘンレー Henle ニヨレバ胸椎ノ上部ニ於テ脊髓ハ最モ細小ナリト云フ

ラウベル Rauber モ亦特ニ胸椎ノ上部ヲ以テ計算ニ加ヘタリ

前段列記スル處ニ從ヒ右三部位置ニ就キ歐洲人ノモノト比較スレバ

頸膨大最大部位ハ歐洲人ニアリテハ概シテ第五乃至第六頸椎ノ高サニアリ而シテ余ガ成績ニ徴スルモ又實ニ然リシナリ

只 Henle ハ第五頸神經ノ起始部ニ相當スト云ヘルモ余ガ成績ニヨレハ第六頸神經根部ニ位スルモノ最モ多カリシナリ

腰膨大最大部位ニ就テハ歐洲人ニアリテハ只一般ニ第十二胸椎ニ位ストナセリ余ガ成績ニ於テモ亦之ニ同ジク第十二胸椎ニ位セルモノ最モ多數ヲ占メ第十一胸椎ニ位スル

ノ之ニ亞ゲリ又脊髓神經根ニ關シテハ第三腰神經起始部ニ位スルモノ最モ多カリシナリ
 胸髓最小部位ニ就テハ既記ノ如ク西書記スルトコロ一定セズ Henle, Rauber ハ胸椎ノ上部ニ於
 テ脊髓ハ最少ナリト云ヒ Ravenel ハ胸椎ノ殆ンド中部ニ於テ然リト云ヘリ余ハ男女二十五回ノ
 調査中一回モ第六胸椎ヨリ上部ニ於テ之ヲ觀察セザリシナリ而シテ余ノ成績結果全ク Henle,
 Rauber ノ所見ニ反シ寧ロ Ravenel ノ記載セルガ如ク大多數ハ第六胸椎ニ存シ第七第八胸椎ニ存
 スルモノ之ニ亞ゲルナリ

第四篇 脊髓重量關係(第一表參照)

Gewichtsverhältnisse des Rückenmarks. (Tabelle I).

(第一) 脊髓ノ重量 Das absolute Gewicht d. Rückenmarks (ohne Nervenwurzeln).

脊髓重量ノ秤定ハ實ニ余ガ本調査ニ於テ最モ主眼トセル測定點ノ一ナリシ余ガ男性十六、女性
 八名ノ屍體ニ就テ秤定セシ成績結果ハ次ニ示スガ如シ

日本人脊髓重量

男子ニアリテハ最大 39,5gr 最小 19,0gr ニシテ平均 25,5gr ナリ

女子ニアリテハ最大 39,0gr 最小 19,0gr ニシテ平均 23,9gr ナリ此差 1,6gr トス

次ニ歐洲人ニ就テ西書記スルトコロノモノヲ檢索スルニ種々頗ル異同アルヲ認ムナリ

チーベン Zielien ニヨルバ

一般成人ノ脊髓重量ハ通常 30,0gr ナリトシ次ニ平均重量 27,0—28,0gr ト記載セリ

ヘンリー Henle ニヨレン

脊髓重量 25,0—30,0gr ナリトシ

クラウゼ Krause ニヨレン

脊髓重量 34,0—38,0gr ナリトシ

ミース Mies ニヨレン

脊髓重量 24,0—33¹/₃gr ナリトシ

アルノルド Arnold (被膜神經根ヲ去リテ)

大人平均重量 1 Unze ナリトシ

ビシヨフ Bischoff ニヨレン

(第一)神經根ヲ包括シテ

男子 平均 46,0gr

女子 平均 39,5gr

此差 6,5gr

(第二)神經根ヲ除去シテ

子男 平均 28,0gr

女子 平均 26,4gr

此差 1,6gr ナリトシ

メツケル Meeker ハ胎兒及小兒ニ就テ次ノ如ク記載セリ

三ヶ月胎兒 0,12 腦ト比較シテ $\frac{1}{18}$

五ヶ月胎兒 0,36 $\frac{1}{6}$

九ヶ月胎兒 2,7 $\frac{1}{1}$

五ヶ月小兒 5,4

ミス Mies ハ死産又ハ生後十二日ニテ死亡セル二十一名ノ嬰兒ニ就テ

脊髓重量平均 2,0—6,0gr ナリシト云フ

チーレン Zielen ニヨレバ早キ小兒期ニ於テ脊髓ハ速ニ増長シ後ニハ徐々ニ發達スルモノナリト云フ

エンゼン Jensen ハ多數ノ精神病者 Geisteskrankte ニ就テ計測シ(但シ麻痺狂者 Paralytiker ハ除外トナセリ)脊髓重量ヲ次ノ如ク報告セリ

男子 38,2gr

女子 32,4gr

又最モ重キ脊髓ハ癲癇患者 Epileptiker ニ於テ之ヲ發見シ重量實ニ 50,0gr ヲ算セリト云フ記シテ以テ參考ニ資ス

余ハ今茲ニ余ノ日本人脊髓重量ニ對シテ上記歐洲人ノ脊髓平均重量ヲ比較セムカ、日本人脊髓ハ絶對的ニ多少歐洲人ヨリモ其重量小ナルコト疑フ可カラズ而シテ此差ハ實ニ平均約 30gr 内

外ヲ算スベシ

Jensen ハ脊髓ノ最大重量トシテ 50.0gr ノモノヲ報告セリ是ヲ余ガ平均重量ニ比スレバ實ニ略二倍ニ當レルナリ

日本人脊髓重量ノ最大ナルモノハ略 30.0gr ニシテ最小ナルモノハ 19.0gr ナリシナリ
 次ニ男女兩性ニ就テ論セムカ、通常男子ハ女子ヨリモ多少大ナルコト彼我全ク相一致セリ、殊ニ前記 Bischoff ハ(神經根ヲ去リテ)平均差 1.6gr ナリトシ余ガ成績ニ於テモ亦平均此差 1.6gr ヲ得タルハ奇ナラズヤ

(第二) 脊髓重量ト體重トノ比較

Vergleichung des Rückenmarksgewichtes mit dem Körpergewicht.

體重ト腦重量トヲ比較シテ生理學上甚ダ興味ノ存スルハ皆人ノ知ルトコロナリ、余ガ今脊髓重量ト體重トノ比較ニ就テ知り得タルトコロノモノハ左ノ如シ

但シ余ハ脊髓重量ヲ秤定セルモノ男屍十六、女屍八名ナリシナリ、然レモ體重ヲモ同時ニ秤リ知レルモノ男屍十五、女屍五體ナリキ故ニ爾餘ハ棄テ、兩者同時ニ秤定シタルモノニ就キ茲ニ其比較ヲ表示セムトス、蓋シ箇々別體ニ就キ檢セルモノハ同一體ニ就キ兩者同時ニ秤リタルモノニ比シ全然其正鵠ヲ得ザレバナリ

余ガ男女二十屍ニ就テ知り得タル體重ノ成績ヲ記スレバ次ノ如シ

男子 平均 43995.0(54500—26800)

女子 平均 31665.8(44037-28000)

之ヲ右二十屍ノ脊髓平均重量即 男子十五屍ニ就テ) 26.1 女子(五屍ニ就テ) 24.1
ニ比算スルキハ

脊髓重量=1,

男子 1 : 1685.6

女子 1 : 1438.4

トナルナリ

次ニ歐洲人ニ就テ只 Mies ノ調査セルトコロニヨレバ、脊髓及體重ノ比例數ハ次ノ如シ

脊髓重量=1

成人 1 : 1848.5

初生兒 1 : 851.4

今之ヲ余ノ成績ト直接比較スルトキハ、脊髓ノ體重トハ比較的重量ハ、日本人ハハ歐洲人ヨリモ
確ニ大ナルコトヲ知ルベシ

Oruveilnier ニヨレバ人類ハ凡テ動物ノ中ニテ(但鳥類ハ除外トス)最モ大ナル比較的脊髓重量 Das
größte relative Rückenmarksgewicht ヲ有スルモノナリト云フ

Ziehen ハ各種ノ動物ニ就テ秤量比算シ精細ナル成績ヲ其著書ニ掲載セリ

(但シ是等ノ秤量ニ際シテハ勿論毎ニ脊髓硬膜ヲ截除セルナリ)

カイト Keith ハ年齢ト共ニ脊髓重量ノ増加ヲ試験シ次ノ結果ヲ得タリト云フ

成人	8.2	1/306
3½ 月	5.6	1/218
2½ 月	4.2	1/197
初生児	0.75	1/163

其他 Ziehen ハ胎生及初生ノ猫兒ニ就テ、Mies ハ初生及成長セル猫ニ就テ、Ranke ハ幼鼠ニ就テ、又 Mies ハ狸、犬ニ就テ各研究調査シ詳細ノ報告ヲナセルモ茲ニハ之ヲ省略ス

余ハ尙終リニ男女兩性ニ就テ對比スルニ余ガ成績ニ徴スレバ女子ノ此比較的重量ハ却テ男子ヨリモ大ナルコトヲ知レルナリ

(第三) 脊髓重量ト腦重量トノ比較

Vergleichung d. Rückenmarksgewichtes mit dem Hirngewicht.

コレ余ガ本調査ニ於テ最モ主眼トセル測定點ナリシナリ

既記ノ如ク余ガ脊髓ノ秤量ヲ行ヒタルモノ男屍十六、女屍八名ナリシナリ、然レモ脊髓及腦兩者同時ニ屍體ヨリ剔出秤量シ得タルモノハ實ニ男屍十二、女屍五體ナリシナリ、故ニ余ハ今茲ニ是等十七體ニ就テ秤定ノ比較關係ヲ表示セントス

尙余ハ腦ニ就テハ別ニ多数ヲ秤量シ其外頭蓋及腦ニ就キ二三ノ計測ヲ行ヘリ是等ハ本問題外ニ屬スルヲ以テ追テ又別ニ報告スルコトアラム

今余ガ十七屍ニ就テ秤リタル腦重量ノ成績ヲ記スレバ次ノ如シ

男子 (十二例)

平均腦重量 1340.2(1530-1193)

女子 (五例)

平均 重量 1249.0(1305-1156)

之ヲ右十七屍ノ脊髓重量平均男子十二屍ニ就テ) 25.0、女子(五屍ニ就テ) 22.9ト比算スルキハ

男子 脊髓重量=1.

1 : 53.5

女子 脊髓重量=1.

1 : 54.5

トナルナリ

チーヘン Ziehen ニヨレバ

脊髓ノ腦重量ニ對スル比較的重量ハ人類ニ於テ最低ナリト而シテ動物界ニ於テ魚族ニ至ル迄ハ漸々減退セリト云フ Mies, Carus, Keith, Ziehen, Trevirans, Ranke, Lennet等ノ諸家ハ諸種ノ動物ニ就テ又之ヲ調査セリ

人類ニ就テ Carusノ報告ニヨレバ

Chanssier

1/19-1/25

Meckel 1/40

Arnold 1/48

v. Bischoff ヲモハフ

男子 1 : 36,58

女子 1 : 35,16

尙同氏ノ他ノ記載ニ從ヘバ

(第一) 神經根ヲ加算シテ

男子 1 : 30,4

女子 1 : 32,66

(第二) 神經根ヲ除キテ

男子 1 : 49,9

女子 1 : 49,24

ミース Miss ニヨハフ (D. med. Wochenschrift. 1897.)

男子 1 : 51,13

女子 1 : 49,80

ナリト云フ

今余ガ成績ヲ Bischoff, Mies 等ノ報告ニ徵スルニ日本、人、脊、髓、ハ、此、比、較、的、重、量、ハ、歐、洲、人、ニ、比、シ、遙

ニ輕小ナルコト疑フ可カラザルナリ

但シ男女兩性ニ就テハ彼我全ク相違シ余ガ成績ニヨレバ男子ハ女子ヨリモ大ナリシナリ

而シテ Bischoff, Miss 等ハ女子ハ男子ニ比シ其比較的重量大ナリトセリ而モ Bischoff ガ脊髓神經

根ヲ加算シテ計測セシ結果全ク反對ニ(余ガ成績ト同ジク)男子ハ(僅ナガラ)女子ヨリモ大トナレ
ルハ聊カ研究スベキ點ナラム

脊髓重量ヲ腦重量ト比較シテ人類ニ於テ最低ナルコトハ既ニ Soemmering (1798) ノ確ニ證認セ
シ所トス而シテ脊髓ハ分娩ノ後著シク増大ス即茲ニ脊髓ノ成長ハ寧ロ腦ヨリモ顯著ナルナリ
又 Miss ミリスノ調査ニヨレバ

三ヶ月胎兒(人) 1 : 18

五ヶ月 1 : 101

初生兒(男性) 1 : 117

初生兒(女性) 1 : 113

依之觀是人胎兒ニアリテハ恐クハ分娩ニ至ル迄ハ脊髓重量ハ腦重量ヨリモ徐々ニ増加スルナ
ラムト云フ

附 錄

小兒又ハ胎兒ニ就テ計測比較スルコトハ、最モ重要ニシテ且興味アルコトニ屬ス、然レモ是等適
當ノ材料ハ容易ニ得難ク只余ハ僅ニ生後二ヶ月ノ一女兒ニ就テ、腦及脊髓ノ計測ヲ行ヘリ、即之

ヲ編末ニ附記シテ敢テ他日ニ資セムトス

○十、二ヶ月

身長 53cm (頭部 4.5 胸部 10.5
腰盤部 6.5 骨盤部 4.0)

(1) 脊髓ノ長サ 16.5cm

(2) 脊髓各部ノ長サ 頸部 3.6 胸部 8.5 腰部 3.0

(3) 終線ノ長サ (内終線ノ長サ 5.4cm
外終線ノ長サ 3.7)

(4) 頸膨大最大部位

横徑 8mm. 矢狀徑 6mm 周圍 22mm.

(5) 胸髓最小部位

横徑 4mm. 矢狀徑 3.7mm. 周圍 14mm.

(6) 腰膨大最大部位

横徑 6mm. 矢狀徑 5.7mm. 周圍 16mm.

(7) 脊髓各部ノ下界位

I 頸部下界 第三頸椎ノ下部

II 胸部下界 第九胸椎ノ上部

III 腰部下界 第十二胸椎中部

(8) 錐體下界位 第二腰椎下部

- (9) 硬膜囊下界部位 第二薦骨椎中部
- (10) 頸膨大位置 第一胸椎ヨリ第七頸椎上部迄
- (11) 腰膨大部位 第十一胸椎上部ヨリ第十二胸椎ノ下部迄
- (12) 頸膨大最大部位 第五頸椎、第六頸神經根束下部
- (13) 腰膨大最大部位 第十一胸椎ト第十二胸椎トノ中間第四腰神經根部
- (14) 胸髓最小部位 第六胸椎下部、第八胸神經根上部
- (15) 脊髓重量 3,9gr
- (16) 腦ニ就テノ諸徑
 横徑 8.5 前後徑 10.6 高徑 8.0
- (17) 腦重量 ?

結論 Schlussbemerkungen.

(第二) 脊、髓、ノ、長、サ、

日本人ノ脊髓ハ歐洲人ニ比シ、大差ナク、殆ンド相伯仲シ、殊ニ女子ニアリテハ彼ヨリモ超越セルモノ多シ(コレ人類學上注意スベキ點ナリト思惟ス)、男女兩性ニ就テハ、男子ハ女子ヨリモ常ニ絶對的ニ大ナルコト彼我相一致セリ、只兩性ノ差ハ歐洲人ニ比シ甚ダ少ナク、即日本婦人ノ脊髓ノ長サハ殊ニ比較的長キコトヲ知レリ

(第二) 脊、髓、各、部、ノ、長、サ、

各部ノ長サヲ全長ニ對比スルニ、大體ニ於テハ歐洲人ト其關係同ジ即胸部、ハ男子女子ヨリモ長ク腰部、ハ女子ハ男子ヨリモ長キコト兩者全ク一致セリ然レモ頸部、ハ却テ男子ハ微ニ女子ヨリモ長ク骨盤部、ハ男子殆ンド同等ナリシナリ

(第三) 終線ノ長サ

日本人内終線ノ長サハ歐洲人ニ比シ、¹⁰⁰内短ク、外終線ノ長サハ殆ンド大差ナカリシナリ

(第四) 脊柱ノ長サト脊髓ノ長サトノ比較

日本人脊髓ノ此比較的長サハ歐洲人ニ比シ、多少大ナルベク、將タ男女兩性ニ就テハ、女子ハ却テ男子ヨリモ大ナリシナリ

(第五) 脊柱各部長サト脊髓各部ノ長サトノ比較

脊髓各部ノ長サヲ脊柱各部ニ比較スルニ、頸部、ハ男子ハ脊柱頸部ノ長サ大ナリシニ準シテ女子ヨリモ大ナリ、胸部、ハ男子ハ脊柱胸部ノ短カリシニ反シテ女子ヨリモ又遙ニ大ナリ、腰部、骨盤部、ハ男女比較シテ殆ンド同等、只微ニ女子ハ却テ男子ヨリモ大ナリシナリ

(第六) 脊髓ノ長サト身長トノ比較

コレ人類學的ニ觀察シテ最モ興味ヲ覺ヘシ所ナリ日本人脊髓ハ脊柱ニ於ケルト同ジク身長トノ比較的ノ長サハ歐洲人ニ比シ遙ニ著シク大ナルコトヲ確認セリ、換言スレバ日本人ハ身長小ナルニ係ラズ、脊髓ハ比較的長カリシナリ、又女子ハ男子ニ比シ一般ニ身長ノ小ナルニ係ラズ、脊髓ノ長サハ男子ヨリモ比較的大ナリ、於是乎、脊髓ノ長サハ常ニ必ズシモ身長ノ大小ニ隨伴セサ

ルコトハ、管ニ人種的ニ於テ、然ルノミナラズ、又實ニ一種屬中ニ於テモ、各箇人男女等ニ就テ特殊ナルヲ知ルベシ

(第七) 頸膨大最大部位ノ横徑、矢狀徑及周圍

一般ニ横徑ハ矢狀徑ヨリモ 3mm 以上長カリシナリ、横徑ノ著シク増大セルコトハ歐洲人ノモノト比較シテ其關係殆ンド相同ジ、即頸膨大部ノ斷面ハ零横橢圓ニシテ、微ニ前後ニ壓平セラルベシ、周圍ハ腰膨大部ニ於ケルヨリモ大ナルコト、彼我一致セリ、男女兩性ニ於テハ女子ハ却テ僅ニ大ナリシナリ

(第八) 脊髓(胸髓)最小部位ノ横徑、矢狀徑及周圍

概シテ横徑、矢狀徑共ニ歐洲人ニ比シ只 1mm 内外小ナリシノミ、而シテ歐洲人ト等シク其全形恐クハ圓壘形ナルベシ、周圍ニ就テハ女子ハ却テ僅ニ男子ヨリモ大ナリシナリ

(第九) 腰膨大最大部位ノ横徑、矢狀徑及周圍

余ハ此計測結果歐洲人ノモノト大ニ相違ノ點アルヲ注意セリ、横徑ト矢狀徑トハ一般ニ大差ナク平均男子ハ只僅ニ 0.35mm ノ差アリ、女子ハ殆ンド同長ナリシナリ、而シテ更ニ此兩徑ヲ歐洲人ニ比較スルニ矢狀徑ハ略同長ナルニ係ラズ、横徑ニ於テ著シク(3mm 内外)短小ナルヲ知レリ、若シ此事實ヨリ打算スルキハ日本人ノ腰膨大ハ歐洲人ニ比シ多ク圓壘形ニ近カルベシ、周圍ニ就テハ頸膨大ヨリモ小ナルコト、彼我一致セリ、男女兩性ニ就テ男子ハ女子ヨリモ稍々大ナリシ也

(第十) 脊髓頸部、胸部、腰部ノ下界位 (略)

(第十一) 脊、髓、錐、體、ノ、下、界、位、

日本人ハ概シテ第二腰椎ニ位スルモノ最モ多シ之ヲ歐洲人ニ比スルニ確ニ我ノ低位ニ存スル
コト疑フベカラズ又女子ハ一般ニ男子ニ比シ尙低キニアルコト彼我同一律ナリ

(第十二) 脊、髓、硬、膜、下、界、位、

日本人ハ一般ニ第二薦骨椎ニ位スルモノ最モ多ク歐洲人ニ比シ又僅ニ低位ニアルモノ、如シ
(第十三) 頸、膨、大、部、位、置、

男女一般ニ上ハ第一乃至第二頸椎ニ始マリ、下ハ第六乃至第七頸椎下部ニ終レルモノ最モ多シ
之ヲ歐洲人ニ比スルニ只下界ハ著シク高位ニアルガ如シ

(第十四) 腰、膨、大、部、位、置、

男女共ニ上ハ第十乃至十一胸椎ニ始マリ、下ハ第十二胸椎乃至第一腰椎ニ終ルモノ最モ多シ、之
ヲ歐洲人ニ比スルニ只上界ハ僅ニ低キノ觀アルノミ

(第十五) 頸、膨、大、最、大、部、位、置、

男女共ニ第五乃至第六頸椎ニ位シ(歐洲人ニ同シ)脊髓神經ニ對シテ第六頸神經根部ニ概當セリ
(第十六) 脊、髓、胸、髓、最、大、部、位、置、

一般ニ第六胸椎若クハ以下ニ位スル者最モ多ク脊髓神經ニ對シテハ第九胸神經根部ニ當レリ
(第十七) 腰、膨、大、最、大、部、位、置、

一般ニ第十二胸椎ニ位セルコト歐洲人ト畧相同シ脊髓神經ニ對シテハ第三乃至第五腰神經根

部ニ概當セリ

(第十八) 脊髓ノ重量

日本人ハ歐洲人ニ比シ、絶對的ニ小ナルコト疑ナシ、此差恐クハ *Corr.* 内外ヲ算スベシ、男女兩性ニ就テハ男子ハ女子ヨリモ絶對的ニ大ナルコト彼我全ク相一致セリ、而モ此差ハ平均 *10%* トナリ *Bischoff* カ報告セルモノト全ク同數ヲ得タルハ實ニ奇ナリト謂フベシ

(第十九) 脊髓重量ト體重トノ比較

兩者同時ニ秤リタルモノニ徴スルニ脊髓ノ比較的重量ハ日本人ハ却テ歐洲人ヨリモ大ナリシナリ、又男女兩性ニ就テハ女子ハ比較的男子ヨリモ大トナレリ

(第二十) 脊髓重量ト腦重量トノ比較

コレ余ガ本調査ニ於テ最モ主眼トセル點ナリ、腦及脊髓兩者同時ニ剔出秤量シ得タルモノニ就テ脊髓ノ比較的重量ハ日本人ハ歐洲人ニ比シ遙ニ小ナリシナリ、又男女兩性ニ就テハ彼我相反シテ男子ハ女子ヨリモ多少大トナレリ

今ヤ余ハ此篇ヲ終ルニ臨ミ一言セムトス初メ余ガ本調査ニ就事スルヤ當時尙教室ノ創設ニ際シ爾後百事多端ノ折柄、尊敬スル恩師鈴木博士ハ始終懇切ナル獎勵ト嚴格ナル注意ヲ加ヘラレ、將タ特ニ參考書ヲ惠與セラレタルハ余ガ心竊ニ感謝シテ已マザル所、尙加門助教授ガ直接間接此業績ニ關シテ非常ナル便益ヲ與ヘラレタルハ深ク感謝ノ意ヲ表スル所ナリ (完)

* * * * *

參考書目

- (1) Michel Ravenel, Massverhältnisse der Wirbelsäule u. des Rückenmarks beim Menschen. Zeitschrift f. Anat. u. Entwicklungsgeschichte B. d. 2. 1877.
- (2) Ziehen, Nervensystem. 1899.
Macrosc. u. microsc. Anatomie des Rückenmarks u. des Gehirns.
- (3) Pflizner, Untere Grenzen der Rückenmarkabschnitte u. des Duralsacks. Morphologisches Jahrbuch. 1884.
- (4) Baelz, Die körperlichen Eigenschaften der Japaner. Mittheilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- u. Völkerkunde. 32 Heft. 1885.
- (5) Prof. Koganei. Beiträge zur physischen Anthropologie der Aino. I. Untersuchungen am Skelete. 1893.
- (6) Prof. Taguchi. Beiträge zur topograph. Anatomie des Kehlkopfes. Archiv f. Anatomie u. Physiologie 1889.
- (7) Hyrtl, Handbuch der topographischen Anatomie.
- (8) Henle, Handbuch d. systematischen Anatomie. 1879.
- (9) Arnold, Handbuch d. Anatomie des Menschen. 1851.
- (10) Rauber, Lehrbuch d. Anatomie. 1898.

- 第十會雜誌第二十八號
- (11) Gegenbaur, Anatomie des Menschen.
 - (12) Rüdinger, Topograph. Anatomie.
 - (13) Kölliker, Entwicklungsgeschichte.
 - (14) Nauwerck, Sectionstechnik. 1894.
 - (15) Anatomischer Anzeiger. 1894.
 - (16) Archiv f. Anat. u. Physiologie. (Anat. Abt.) 1882.
 - (17) " " 1883.
 - (18) " " 1885.
 - (19) 田口博士 解剖攬要卷ノ二ノ上
 - (20) 三浦博士 剖檢法
 - (21) 鈴木博士 東京醫學會雜誌第六卷第十一號 (本邦人ノ腦重ニ就テ)
 - (22) 足立學士 全 第十卷第二十四號 (本邦人筋脈管ノ調査)
 - (23) 全上 全 拔刷 (本邦人眼窩調査)
 - (24) 田口博士 中外醫事新報第五百三十二號 (本邦人腦ノ重量)
-